

『金沢大学50年史』編纂と大学関係資料の保存

History of Kanazawa University and Social Role of University Museum

金沢大学経済学部 橋本哲哉

目次

はじめに

I 『金沢大学50年史』編纂と資料発掘

II 四高関係資料とその目録化

むすびにかえて

—金沢大学史関係の資料保存をめぐる—

はじめに

戦後発足した新制大学は、1999（平成11）年一斉に創立50周年を迎えた。もちろん、金沢大学も創立記念日の5月31日を中心にその創立と歴史を祝って記念行事を開催した。記録する意味で、その主な事業・行事の概要を述べると次のようなものとなった。

まず金沢大学50周年記念エリアの整備として、角間キャンパス内に遊歩道・管理棟などを設置する企画で、これはその後の「角間里山自然学校」を展望し、地域交流も取り込んだところの計画として現在進行中である。

次に重視されたのは『金沢大学50年史』編纂事業で、次節に詳述する。これに付随して写真集『金沢大学 写真で見る50年』も発刊された。

また、いくつかの記念シンポジウム・講演会も開催された。国際シンポジウム「地球—水—自然」、特別講演会「21世紀の日本と大学の役割」（講師；評論家立花隆）、若手研究者シンポジウム。それに県内4か所で開催された「地域

交流シンポジウム」で、もっぱら各自自治体と協力し、石川県・金沢市の市民の参加も得た事業となった。そして創立記念の式典と、角間キャンパス資料館で行われた記念展示も加えておく。

こうした記念事業・行事を押し進めるために事業委員会が全学で組織され、事業の実施に見合う経費に充当するため、おおむね3億円募金目標を設定した。さらに大学関係者・卒業生・企業などに募金を募るために、記念事業後援会が活動に取り組んだ。最終的には2億2千万円の募金を得、目標を下回ったが、各事業予算の見直しなどを随時すすめて、ほぼ予定通りの事業の実現を見た。2000（平成12）年末の段階では、記念エリア建設と『金沢大学50年史』（通史編）の編集作業は現在進行中で、それ以外の事業はすべて終了したわけである。

『金沢大学50年史』の刊行は、当初より重要な中核的記念事業として位置付けられた。これまで金沢大学は簡単な『金沢大学十年史』（1960年刊）しか持っていなかったこともあり、作業は最も早くから着手された。また全学各部局からも協力を得て、文字通り全学的事業として編纂、執筆作業が行われている。それらの業務の中心となり、また各部局の作業の円滑化を図るために1996（平成8）年に同編纂室がオープンし、全学から選ばれた編纂委員会のもとに講師1、助手1及び非常勤職員2名が配置された。この編纂室を中心に、資料収集作業をはじ

め、基本的な編纂作業が順次行われていったが、その作業を通じて金沢大学史関係の資料、及び膨大な大学関係資料が新たに収集された。編纂作業の世話役を仰せつかり、この間資料収集や編集の先頭に立ってきたが、その経験の中間的なまとめを兼ねて大学史資料の保存の問題に関して、若干の提言をこの機会を借りて述べることにしよう。

I. 『金沢大学50年史』編纂と資料発掘

『金沢大学50年史』の編纂は同「通史編」（以下「通史編」と略）と同「部局編」（以下「部局編」と略）の2冊刊行することがまず確認され、あわせて創立記念行事と一体化させるために最初に「部局編」を発刊し、2001（平成13）年には「通史編」を刊行するという目標が設定され、諸準備が開始された。それは2冊2千5百頁をこえる本を2年、あるいは3年間で作ることは困難で、いくつかの部局では従来個別の部局史を刊行したという実績を有していることなどを勘案して、「部局編」を創立記念日に間に合わせることにして、優先して作業したわけである。

これまでに刊行されている部局史の主なものを、次に掲げておこう。『金沢大学医学部百年史』（1972年刊）、『金沢大学薬学部百年史』（1967年刊）、『金沢大学工学部50年史』（1970年刊）、『金沢大学教育学部附属小学校百年史』（1974年刊）、『附中のあゆみ50年』（1999年刊）、『附高五十年史』（1997年刊）、『百年のあゆみ（附属幼稚園）』（1987年刊）、『創立30周年記念誌（附属養護学校）』（1994年刊）などである。

さて、『金沢大学50年史』を編纂するにあたって、次のような「基本的な考え方」（編集方針）を確認した。要約すると①他大学の同類の企画と比較しても見劣りしない歴史書を刊行する、②金沢大学全体の歴史を客観的かつ通史的に捉え、また多面的に考察して読みごたえのある大学史とする、③金沢大学を広く地域に開かれた

大学として位置付け、また大学としての自己点検も行うような視点で編纂する、④通史編・部局編の上下2巻構成とし、前身校の歴史も含める、⑤読みやすい叙述につとめ、ヴィジュアルな構成、人名索引作成にも配慮する、⑥学内外の文書資料の収集に力を入れ、ヒアリングも適宜行う、⑦編纂後、重要な資料などの整理保存を行う、といった諸点であった。

「部局編」は創立記念式典には間に合わなかったが、約束より1か月遅れて1999（平成11）年6月末、橋本確文堂の印刷によって完成をみた。16章1,250頁からなり、少々持つのに苦痛なほど大部な書物となった。「通史編」は現在原稿がほぼ出揃ったという刊行途中にあるので、ここでは「部局編」の評価、それも個人的な中間評価としていくつかの点を以下にまとめておきたい。

前述したように、医・薬・工学部など部局史をすでに出している学部は実績も蓄積もあり、「部局編」へのかかわりは比較的スムーズに進行した。歴史を専門とするスタッフが必ずしも部局内にいないにも係らず、積極的に対応していただいたことに対して感謝したい。この点は附属学校園も同様で、そのへんの事情も配慮して独立した章として取り扱うこととなった。その歴史も含めて、附属学校園の金沢大学における重要な位置を確認できたと思う。

文・法・経済学部、教育、理学部という、かつて城内学部と呼んでいたこれらの学部にはまとまった部局史が存在せず、今回はじめて本格的な部局の歴史の資料収集と歴史叙述をお願いした。また教養部、がん研究所なども同様である。法文学部と教養部は改組されてしまったので、今回の「部局編」がその公的な唯一の歴史となった。その意味でも刊行の意義があったと考える。これらの取り組みのなかで、ヒアリングを含めて多くの新資料が発掘されたことは評価されよう。とくに、それぞれの前身校、具体的には四高と師範各校に関して大きな成果を上げた。四高の資料収集については次節で紹介す

るが、師範史については、従来『石川師範教育史』（1953年刊）が基礎的文献であったが、教育学部のスタッフなどの努力によってその水準を大きく超えたといえる。さらに金沢高等師範に関しては、卒業生の協力もあって初めて明らかになった点も多い。開校から閉校までの時間はもっとも短かったが、金沢高師の存在意義がより明確になったと考える。

全体的な評価は「通史編」刊行後に行いたい、執筆を各部局に任せ、内容・表現については「部局自治」と考えて編集権をふるわなかった。そのため編集方針⑤の読みやすい叙述を心がけるといふ点に関しては、若干の問題点が見られた。通常の論文発表を基本的には英語主体とする理系学部では、日本語の文章表現にやささか不慣れな面が感じられた。さらに時間的制約から執筆者校正を1校のみとしたため、多くの誤植を生み出してしまった。この点は編纂委員会の反省点で、「通史編」では正したいと考えている。編集途中から、写真集を別に出版することとなったので、写真の多くはそちらにゆだね、結果として「部局編」は必ずしもヴィジュアルな構成とはならなかった。しかし、平行して編集した『金沢大学 写真で見る50年』には新しく発見された貴重な写真、前身校時代の写真も数多く掲載され、充実した企画となって残された。人名索引はつけることができなかったが、「通史編」刊行にあたって2巻のCD-ROM版の同時出版も計画されており、それに検索機能を付与すれば索引に代えることは可能だと考えている。

『金沢大学50年史』編纂事業を本格的なものとするため、その当初から新資料の発掘と収集資料の整理に心がけてきた。その現状を中間報告すると、次のような特徴を指摘できる。まず①前身校関係の資料に関して、後述するようによく四高の新資料発掘と整理（目録発行）に大きな進展を見た。また師範各校の資料収集と研究も成果を上げたといつてよい。②金沢大学発足の経緯について、一部GHQ関連の資料も

含めて新発掘がすすんだ。この点は石川軍政隊関係も含めて、今後じっくりと時間をかけて研究する必要性も感じられた。③1970年代のキャンパス移転の学内論議とその後の角間移転に関する詳細な資料の整理が行われた。これらの成果はもっぱら「通史編」に反映されるが、今回の編纂事業の共通の財産といつてよからう。

II. 四高関係資料とその目録化

金沢大学発足の重要な土台となった前身校の歴史に関して、前述したように四高以外の各校の歴史は大学（部局）としてすでにまとめた実績を有している。四高・師範各校に関しては、同窓会関係では一定の歴史の整理がなされてきたが、大学側として今回初めて本格的な資料収集と歴史編纂が試みられたといつてさしつかえない。その一部を紹介すると、江森一郎・谷本宗生「金沢大学所管の金沢高等師範学校・第四高等学校・石川師範学校関係資料」（『金沢大学教育学部紀要 教育科学編』第48号、平成12年2月）がある。資料収集と研究の具体的成果は「通史編」の第1～3章で主として披露されるが、ここではすでにおおむね終了している四高関係の資料収集の結果とその問題点を述べることにしよう。

編纂事業の開始当初から四高の歴史を重視し、その関係資料を一括管理することができないかと考えていた。四高関係資料は、金沢市内においては大きくみれば石川近代文学館、石川県立歴史博物館、石川県立図書館、金沢市立図書館、四高同窓会、そして金沢大学附属図書館をはじめとした関係部局に点在しているのが現状である。従来、関係者によって目録作りが行われたが不十分で、何より資料を利用するのに不便このうえない。関係機関の了解が得られるならば、金沢大学50周年を機会にそれを金沢大学で一括管理できないかと考えたわけである。一定の交渉や関係者との話し合いを試みたが、ある四高同窓会幹部から次のようなアドバイスを得た。

「四高の資料は金沢大学にあるべきだとはじめから前提とするのはどうだろうか。四高が地域の中でどのような役割を果たしたかを議論した上で、その後に地域内のどこに資料を置くべきかの議論をすべきではないか」。傾聴に値する意見だと感じた。私見を加えれば、四高なり金沢大学が地域においてどのような公共的役割を有しているかを編纂事業を通じてまず明らかにすること、それが何より先行して重要だと受け止めたわけである。

そこで編纂室では『第四高等学校関係資料リスト』（平成11年2月1日刊、A4版76頁）を作成することを大事な仕事として位置付けた。目録作成は編纂室の谷本宗生助手が中心となり、旧目録の実物照合確認、関係機関の資料調査などを行った。現段階では最も整備された統一目録となって仕上がったと評価している。もちろんデータ入力済であるので、今後改版は容易である。

全国の旧制高等学校に関する最近の文献としては、長野県松本市の旧制高等学校記念館が編集した『旧制高等学校の歩み』（平成12年8月刊）がある。全国41校の旧制高校の案内として便利で、各校の略史も知ることができる。また同様に『旧制高等学校研究必携』（平成12年8月刊）もあり、その編集には多くの研究者が参加し、また大学史研究会といったより広い研究組織も存在する。こうした旧制高等学校についての全国的な研究進展のなかにあって、この目録作成は四高研究のレベルアップに大きく貢献したといってもさしつかえない。

四高資料の存在状況は、この『第四高等学校関係資料リスト』を実際見ていただき、かつ解説も参照願いたい。「第四高等学校一覧」などの基本資料、「北辰会雑誌」はじめ多くの雑誌・同窓会誌類、教科書などの基本文献はもちろん、今回収集し追加した校長・教師などの関係者の日記類、また教材・地図、学校設計図、看板・掛け軸・巻物、葉書・書状、写真といった文献以外の諸資料も掲示した。その総点数は500を

上回る数となった。所蔵確認先も目録中には明記したので、金沢市内を一巡すればすべて現物を確実に手にとることが可能である。

われわれは『第四高等学校関係資料リスト』を作成し、そのうえで「通史編」を刊行する。四高に関するこうした研究的作業が一段落した段階で、四高関係資料をどのように保存していくべきか、あらためて議論を呼び起こしたいと現在は考えている。

むすびにかえて

－金沢大学史関係の資料保存をめぐる－

他の行政機関と同様、大学にとっても情報公開は今後の重要な課題となろう。それに向けての対応は学内のそれぞれの部署で進められているであろうが、大学の歴史資料も公開の対象とされるべきであろう。そうした事態を展望して、これまでの保存資料と共に今回の編纂事業で収集された資料も含めて、保存・管理される必要がある。大学史資料の保存方法とその公開に関しては、もちろん学内でいまだコンセンサスを得てはいない。その必要性の議論を起す意味で、若干の私見を最後に提出することにした。

もし大学史資料の公開を行おうとすれば、次の3つの選択肢があると思う。まず金沢大学50年史編纂委員会及び同編纂室は、この間大学史資料を専門的に収集してきたのでそれを主体とする案である。大学史編纂室を置き、資料の収集と管理を行わせるという東北大学の先例もあり、一度は検討する必要がある。しかし、全学的な約束事として同編纂室は時限的に設置されたので、定員配置を恒久的にするなどの見直しはなかなか厳しいものがある。

第2の選択肢は附属図書館である。現状では一定の定員が配置され、相対的に大きな収容スペースも持っている。しかしながら、内部から見るとそう簡単な選択肢とは必ずしもいえない。定員には研究者が配置されていないし、現定員は図書館の日常業務で手一杯である。本館書庫

も満杯状況に近いともいえる。単に資料を書庫内に保管しておく程度ならば、第Ⅱ期移転キャンパス内に新設予定の自然科学系図書館と関連させて、一定のスペースを展望することは不可能ではない。だが、保管だけでは情報公開に対応できない。

最後の選択肢として資料館が考えられる。資料館は「本学の歴史に関わる資料」を収蔵の基本方針として有している。スタッフが手薄にもかかわらず、現に金沢大学50年史編纂事業においても積極的な貢献を行ってきた。前述した「金沢大学創立50周年記念展示」を企画し、あわせて『蔵書展 金沢大学の源流』、『金沢大学創設資料』という2つのパンフレットも作成した。この論文のタイトルに「Social Role of University Museum」という英語表現を使ったが、単に収蔵した資料を館内に保管するだけでなく、地域に開かれた資料館として公開し、その社会的公共的役割を積極的に追求するべきだ、と提案したい。

